國學院大學学術情報リポジトリ

公開研究会「電波な声：復帰前沖縄における怪情報、抵抗、メディア」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001541

公開研究会
「電波な声：復帰前沖縄における怪情報、抵抗、メディア」

2022年７月７日、ドリュー・リチャードソン氏（カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校、Ph.D. Candidate）および崎濱紗奈氏（東京大学東洋文化研究所東アジア藝文書院特任助教）を招いて、公開研究会「電波な声：復帰前沖縄における怪情報、抵抗、メディア」が開催された。研究会はZoomを用いたオンライン形式で行われた。リチャードソン氏は日本の民俗学・民間伝承・妖怪などの語りのメディア性や土地性をテーマに研究しており、國學院大學に国際招聘研究員として滞在している。以下に、公開研究会の概要を記述する。

発表は、米軍占領下の沖縄で1950年から1972年まで統治に携わっていた琉球列島米国民政府（USCAR）の資料などをもとに、沖縄より送信されていた米国営放送ボイス・オブ・アメリカ（VOA）の危険な電波にまつわる噂を扱うものである。強力な送信機より発せられた電波により、近隣では鍋からラジオ放送が聞こえる、テレビが火花を散らすなどの怪現象が報告された。こうした現象を起こすとされた電波送信に対して抗議運動が起こるとともに、暗号が流されている、怪しい火が見られる、人や動物が感電死するといった様々な怪情報が流布するようになった。こうした噂にはUSCARや日本政府も対応を迫られたが、それは噂が占領に対する抵抗運動へと人々を駆り立てることを危惧していたためである。実際に、USCARへの抵抗が強まると噂も再浮上するという関係が見られ、沖縄の新聞メディアもそうした噂を報道することによって、抵抗を広げる役割を果たしていた。このように、メディアとしての怪情報は革命的な潜在力を持っていたのである。

以上の発表に対し、崎濱紗奈氏によるコメントが行われた。崎濱氏は近現代沖縄と日本の思想史を専門とし、政治と主体、主体性をテーマに研究している。コメントでは時代背景として、土地の強制接収などを伴ったUSCARによる沖縄統治の苛烈さと、それに対する島ぐるみ闘争運動や復帰運動の高まりについて解説された。そうした状況で、USCARは「琉球民族」という主体性の構築をもくろみ、日本からの分断を図ったが、他方で抵抗運動により「沖縄人」としての主体性も生み出されていった。

続いて質問として、誇張された情報という性質をもつ噂話の力について、メディアが主体性を作っているのか、主体性がメディアを形成するのかが問いかけられた。また、現在問題になっているフェイクニュースと噂話との違いについても質問された。最初の質問への返答では、読者が知りたいことをメディアが提供していった結果、USCARの意に反する報道がなされていったと回答された。そのため主体性は、メディアとともに読者にもあるといえる。第２の質問に対しては、噂話はその大部分は事実である点が異なると述べられた。

その後フロアからの質疑応答も行われ、盛況のうちに本研究会の幕が閉じられた。

（藤井修平）